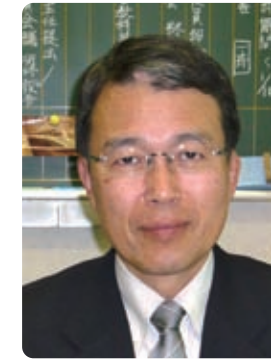


# 東北 VALUE SIGHT 山形



山形県立鶴岡養護学校 校長  
**土門 明** (どもん・あきら)

1954年：酒田市生まれ  
1979年：北海道大学教育学部卒業。山形県公立学校教員に採用され、最上郡金山町立金山中学校に赴任  
1982年：文部省（現文部科学省）在外教育施設派遣教員として、アルゼンチンのプエノスアイレス日本人学校教員を務める  
1985年：酒田市立第三中学校教諭  
1991年：山形県立鶴岡養護学校教諭  
2000年：山形県立酒田聾学校教頭  
2005年：酒田市立東平田小学校校長  
2008年：山形県立酒田聾学校校長  
2011年：山形県立鶴岡養護学校校長 現在に至る  
鶴岡養護学校HP：<http://www.tsuruoka-sh.ed.jp/>

『平成24年障害者白書』（内閣府）によると、全国の知的障害者は54.7万人といわれる。これまで、知的障害者は“守られる”立場であったが、近年は、就業や自立を通じて“社会に参加する”立場に変化してきている。いまだ知的障害者への偏見や差別が消えない中、生徒の社会参加に奮闘する山形県立鶴岡養護学校の取り組みを紹介する。

## 山形県立鶴岡養護 学校高等部生徒の 企業就職 に向けて

### 知的障害者の民間企業就職と厳しい現実

小倉昌男という名前を知らなくても、クロネコヤマトを知らない人はいないだろう。小倉昌男はヤマト運輸の会長だった人である。彼は後半生を障害者の社会自立、職業自立に力を注いだ。また、日本のダストレスチョークで3割のシェアを占める日本理化学工業（大山泰弘社長）では、従業員の7割を知的な障害のある人たちが占める。障害のある子どものための特別支援教育に携わる教員にとって、どれほどこの姿勢に励まされただろうか。

今、障害者の就労に関わる現実には厳しいが、2013年度から、障害者雇用促進法で障害者の雇用率が従業員50人以上の企業で2%に引き上げられる。そのため、企業の間でも障害者雇用についての関心が高まり、先日山形県内で行われた障害者雇用に関わる企業説明会には例年以上の企業が参加したという。

### 地方の知的障害特別支援学校に起きた変化

私が勤務している山形県立鶴岡養護学校は、小学生（小学部）から高校生（高等部）までの比較的重い知的障害のある児童生徒の教育を専門とする学校である。

2007年度から、一人一人の子どもの障害にきめ細かく対応する特別支援教育制度がスタートしたが、本校ではこれを機会に今まで以上に細やかに対応するように努めている。

今、本校には知的障害の子どもだけでなく、肢体不自由や病弱などの障害を併せ持つ、多様な障害の子どもたちが学んでいる。私は子どもたちにどんな知的な障害や能力の偏りがあっても、その子なりの社会参加があり、その子なりの「働き方」とあると信じている。

そのような中、今まで卒業生が民間企業に就職した実績のほとんどない本校高等部に、企業に就職したいという願いのある、やる気と元気のある生徒たちが入学してくるようになった。

### 一人一人の願いに応えるための活動を開始

そこで、2011年度から、集中力と継続して働く力をつけるための特別な教育課程（授業時間）を高等部に設けることにした。また、今までの教育課程を

一部組み替えた。卒業するまでの時間は限られ、障害のある生徒の心身の成長には「時間」と「できるようにするための手だて」が重要である。だから、一日でも惜しい。とにかくやりながら考えるしかないと感じてスタートした。

第1期生は8人の生徒。知的な障害はあるが、身体的には特に問題はない。だが、実際に新しい教育課程が動き始めた時にはすでに2年生になっていた。様々な力をつけるための有効な手立てとして清掃作業を選び、これ一つに集中することにした。清掃作業と言っても、将来清掃業に就くためではなく、あくまで学習の一環であり、手段としてのものである。日々の日課の中では、身だしなみや挨拶、コミュニケーションの取り方に注意を払わせ、作業学習（木工、陶芸、縫製、農園芸などの授業）という働く力をつける学習を大切にしたい。

また、毎週木曜日を、働き方を学ぶ特別な一日とし、午前には会議室や体育館、トイレなど場所を決めて校内の清掃を行い、午後は座学の時間として、会社でのマナー、言葉遣いの基本、休日や余暇の過ごし方、金銭の管理など働く若者にとって必要な研修の時間とした。ハローワークの職員の方、地元の銀行の方にも研修の講師になっていただいた。

校内清掃のために、限られた学校予算の中から何とか清掃用のクリーニングカートと清掃用具を揃え、一からのスタートに当たっては専門の清掃業者の方を招いて、用具の使い方や清掃の心得を講義していただいた。

### やればできるという覚悟と実践

本校の生徒たちには確かに知的な障害があるので、一回聞いてすぐ理解という訳にはいかない。だが、十分なやる気と根気がある。「繰り返し繰り返し」言い聞かせ、やって見せ、手を取り、図で示し、メモを取らせ、指示を復唱させ、注意事項を確認していくことで、やがて見通しが持てるようになり、一人でできることも増えていった。

一人では難しいことももちろんあるが、できない

のではなく、その人の能力の実情に合った、できるための手だてを取りさえすれば、その人の力は発揮される。これが本校の教育理念である。

また、本校の高等部では、年2回2週間ずつ実際に様々な企業現場（事業所）に出て行って実際の職業体験をさせてもらう「現場実習」を大切にしている。

この現場実習を受け入れてくれる企業は、まさに多岐にわたる。豆腐製造店、鉄工所、海産物の食品製造会社、自動車部品製造会社、ペットボトルなどのリサイクル会社、ガソリンスタンドなどである。

このような受け入れ企業を探す職場開拓も、本校教員の重要な職務の一つである。進路指導主事を中心に、高等部の教員がいろいろな企業に「飛び込み」でお願いすることも度々あった。断られることもあったが、待っていても求人募集が来るわけでもない本校には、こちらから当たっていく他はない。ハローワークや障害者就業・生活支援センターの担当者と連携しながら、本校の方から「こちらの会社で障害のある生徒に向く仕事はありませんか」「一度、鶴岡養護学校の高等部生徒に実習させてもらえませんか」とお願いし、実習の受け入れ先や、少しでも雇用の感触のある企業を探し歩いたのである。



校内での清掃作業の様子。生徒たちの社会参加への第一歩と位置付けている。

職員室に今日は何かから実習OKを取ったなどと選挙の当選よろしくちり紙製の赤いバラを並べることもあった。

### 知的障害のある生徒の就職は周りが支える

実際のところ、社会での知的障害者の理解は十分ではない。「知的に障害がある」ことを伝え、誤解がないようにと説明を始めた時点で断られ、その先の話ができないこともある。障害者は「働くことができない」という先入観があることを感じることもある。

企業にしても、上意下達の社員教育ではすぐに限界に突き当たる。知的な障害のある人が活躍するためには、周りのサポートが欠かせない。障害の状況、適性、得意不得意の理解はもちろん、周りで少しずつ知恵を出し合い、どうしたらこの人の働きやすい職場や工程になるか、考えていただくとうれしい。

障害の特性を生かすことも大事だ。例えば、決まった仕事を黙々とできる生徒や、物を揃えるのに少しでもずれると違和感のある生徒がいる。このような生徒に、繰り返す仕事や精密な仕事を任せたら、通常の人ならやがて飽きる仕事も、生徒にはやりがいのある仕事となる。

共生社会を目指すのは易しくはないが、原点はそれぞれの持ち味や能力を出し合い、生かし合う姿勢に尽きる。

### 第1期生の今とチームで取り組む教職員

先の第1期生は今、高等部3年生である。8名のうち6名は一般企業への就職を目指しており、現時点（2012年12月）までに、すでに内定をもらった生徒が4名、結果待ちの生徒や特別実習を頑張っている生徒が2名となっている。

校長である私も、「田んぼの稲は農夫の足音で育つ」との言葉よろしく、生徒がお世話になっている企業に足を運ぶ。事業主や担当者にはその生徒の長所と意欲、得意不得意な面、課題となりそうな点を隠さず率直に話す。

この先も、息の長い障害者理解と雇用のための道が続く。私たち養護学校の職員は、すべての子どもが笑顔で社会人になっていく日を楽しみに今日も生徒と共に歩みたいと願っている。